第　二　章

「自然の貴族制」の「学制」への導入

――その可能性について――

第一節　福沢諭吉と中浜万次郎

１９世紀の中頃から日米の交渉のはじまる前に，アメリカにおいて事実上出来あがつていた開かれた社会並びに自然の貴族制の概念が，その概念の典型的具体化の一つと考えられる公教育制度の概念と共に我国に持込まれる可能性はいくつかあつたのである。

まず第一に考えられる可能性は文献を通じての可能性である。たとえば，「続亜米利加総記」（１８５５―安政２年）とか「連邦志略」（１８６４年―元治元年）といつたアメリカに関する文献が幕末すでに出版されており，アメリカの教育についても極く簡単なものではあるが，紹介されていたのである。(1) しかし，よりくわしいアメリカ及びアメリカの教育についての紹介を行つたものは，なんといつても福沢諭吉の「西洋事情」（１８６５年―慶応元年）である。又福沢の門下生であり，後にアメリカに留学，過度の勉強のため不帰の客となつた小幡甚三郎も「西洋学校軌範」をあらわし，イギリス，オランダ，フランス，プロシア，ギリシヤの教育制度と共にアメリカの教育制度についての簡単な紹介を行つている。(2) しかし，小幡のそれは福沢の指導のもとに書かれたものと考えられるので，ここでは福沢のみについてみてゆきたいと思う。

福沢は，周知の如く，１８６０年（万延元年）には遣米使節団に木村摂津守の従僕として加わり，咸臨丸で渡米し，１８６２年（文久元年）には，先進文明国の文物制度の調査のためフランス，イギリス，オランダ，ドイツ，ロシア，スペイン，ポルトガルを旅行し，更に１８６７年（慶応３年）には幕府の軍艦受取委員長小野友五郎の一行に加わり再び渡米しているのである。(3)

「西洋事情」は，これら三度にわたる外遊の経験と外遊中に手に入れて帰つた書籍にもとづいて書かれたものである。「西洋事情」においては，アメリカをはじめ，イギリス，オランダ，フランス，ロシア等我国と開国当初より極めて深い関係にあたつた国々の制度文物の紹介を行つており，当然これらの国々の教育についても極く簡単ではあるがふれているのである。アメリカの教育については「合衆国北部に於ては児童を教育する小学最も多く，其法甚だ善し，亜米利加政治の一美事と言うべし」(4)と政治と教育との関係を見抜いた上でアメリカの教育制度の長所を高く評価していることが目につく。税金によつてまかなわれる公立学校の維持，運営，及び教育基金とその分配の方法等を紹介し，不充分ながらも学区制，教育委員会制度，無償の義務教育制度，英語の初歩，算術，地理学を教える小学校，ラテン語，ギリシヤ語を教えるグラマー・スクールのあることについてもふれており，更に，私立と州立の大学があること，私立大学とは「私に会社を結んで設るもの(5)」であること，しかして，これらの大学においては「新古語を探求し，文法を学び，歴史を読み，理学，作文学，究理学，修身学等(6)」が研究されていることなどについてもふれ，教育のよく普及していることを賞讃しているのである。短い滞在でありながら，実に広範な分野にわたつて，こまかな点までとらえて帰国していることに驚かされる。しかし，彼の教育制度に関する知識がどの程度「学制」の起草にあたつて利用されたかは定かではない。まして，「学問をするには分限を知る事肝要なり」とする彼がジェファソンの自然の貴族制についてどの程度の理解をもつていたかに関しては疑問が残る。しか

し，彼がジエフアソンの存在を知つていたことは確かなことであり，彼の独立宣言起草に際して果した役割，大統領になつてからの功績等についても一応の知識は持つていた。すなわち「独立の檄文を作るためゼツフエルソン，アダムズ，フランキリン，ジエルマン，ライキントンの五人を推して作文の職に任じ，第六月二十八日，ゼツフエルソン草稿を起して之を評議所に出し…。(7)」と述べたあと，独立宣言を紹介し，さらに，ジエフアソンが大統領となつてから，フランスよりルイジアナを購入したこと等についてふれ，更に「ゼツフエルソン在職の間，盛大の政を施し，貿易を勉め外交を修め，合衆国の盛名欧羅巴諸国に轟くに至れり。(8)」と述べてはいる。いうまでもなく，これだけの言及から，彼，福沢がジエフアソンの政治及び教育思想にどれほどの興味をもち，自然の貴族制についてのジエフアソンの思想をどのように評価していたかについては，福沢の有名な「天は人の上に人を造らず，人の下に人を造らず」という言が，ジエフアソンの独立宣言中の"All men are created equal"にならうものであつたらしいと推測される(9)以上には知るべくもないことである。しかし，福沢が，共和政体のすぐれた点を認め，これを「西洋事情」等においても紹介し，それが，かなりの影響力を持つていたことは注意すべき点である。高橋是清が，佐賀藩のある遊説員と議論をたたかわした際，その遊説員が共和政体を主張していたことについて次のようにいつている。

「…ところが驚いた事には，その人が盛んに共和政体を主張する。当時は福沢先生の西洋事情が非常によく読まれて，その影響が随分強かつたので，この人なども共和政体が我が日本の国体と相容れぬ事など思い及ぼうはずもなく唯一途に議論をするのであつた。(10)」

このような高橋の「西洋事情」への言及は福沢の「西洋事情」が，いかに当時大きな影響力を持つていたかを証言するものであるとともに，閉ざされた社会に住むもので，開かれた社会の話を聞いた時，いかにばら色の夢を抱きやすいかを物語るものでもある。開かれた社会には，開かれた社会の問題があるわけであるが，行つて見てきたものでなければその問題の所在を適確にとらえることは困難なことのようである。高橋は，その実際をみてきた者として「私はアメリカへ行つて共和政体，特に村会や市会の選挙を実際にみて，その腐敗の程度も十分に承知していたので，その事を話して，日本においては共和政体の不可なるゆえんを痛論した(11)」といつている。

とまれ，福沢の共和制に関する発言が，よかれ，あしかれ，極めて大きな影響力を持つていたことがわかるのである。又，彼は学術よりは，アングロサクソンの実際に役立つ具体的な知識技術をより高く評価し，現世の幸福を願い，商売繁盛や富貴栄達を祈願する我国庶民の気持をいたく刺激していたのである。又福沢のこのような見方や選択のしかたは，オールコックが日本の「文明は高度の物質文明であり，すべての産業技術は蒸気の力や機械の助けによらずに到達することができるかぎりの完成度を見せて(12)」いたと観察し更に，「かれらがこれまでに到達したものよりもより高度な，そしてよりすぐれた文明を受けいれる能力は，中国人をも含む他のいかなる東洋の国民の能力よりも，はるかに大きい(13)」とみていた日本人の一つの顕著な傾向性の上に立つものであつたといえるのである。福沢のこのような一見極めて斬新にみえながら実は日本の庶民の心ともよく通ずる一面をもつ物の考え方並びに経験は，明治の初期における和漢両学の退潮と，洋学のめざましい進出の波にのつて教育界においても絶大な影響力をもつようになり，ついには「三田の文部省」といわれるまでになつたのである(14)。

特に，彼自ら，その「発売の全数，今日に至るまで凡七十萬冊(15)」といつていた「学問のすすめ」は彼の最も良く読まれた本の一つといえるものであるが，その中で主張していることは「一身独立して一国独立(16)」するという個人主

義的思想であり，又学問とは「唯むづかしき字を知り，解し難き古文を読み，和歌を楽しみ，詩を作るなど，世上に実のなき文学を云うにあらず……専ら勤むべきは人間普通日用に近き実学なり[17]」とする実学主義的思想であり，更に又「天は人の上に人を造らず人の下に人を造らず[18]」とし，更に「今より後は日本国中の人民に，生れながら其身に附たる位などと申すは先ずなき姿にて，唯其人の才徳と其居処とに由て位もあるものなり[19]」として農工商の三民も士族同様，学問をすべきことをすすめているのである。

これら「学問のすすめ」において福沢の主張するところは，結局，被仰出書において宣明された内容と全くひとしいものであり，[20]又彼の教え子等が，多数文部省内で仕事をしていた事実もあり，[21]たとえ，彼が「学制」の起草委員のうちには加えられなかつたとしても，彼の考え方の一部が「学制」を支える教育観，特に，被仰出書に示されている教育理念の根源の一つとなつていることは，もはや疑う余地のないことである。しかし，ここで注意すべきことは，彼が同時に「このごろは四民同等の基本も立ちしことなれば，何れも安心いたし，唯天理に従つて存分に事を為すべしとは申ながら，凡そ人たる者は夫その身分あれば，亦身分に従い相応の才徳なかるべからず。[22]」とも述べよく分限をわきまえ身分相応の才能を身につけることの肝要なることを説いていることである。彼が四民平等を認めながら，人たる者は夫々その身分があるという時の身分とは一体何を指していたのであろうか。それは，現代社会における流動性に富んだ能力や適性に応じて選びうる職務あるいは役割と類似したものを指しているととつてとれないこともない。というのは，彼は，「今日にても三民（農工商）の内に人物あれば政府の上に採用せられるべき道既に開けたることなれば，よく其身分を顧み，我身分を重きものと思い，卑劣の所行あるべからず[23]」といつており，公職につくにあたつて能力（人物）いかんによる社会移動（social mobility）を認めているように思われるからである。「私のために門閥制度は親の敵で御座る[24]」とまでいつていた彼の意見としては，当然そう解釈するのが妥当なことのように思われるのである。更に彼は「今より後は，日本国中の人民に生れながら其身に附したる位などと申すは先ずなき姿にて，唯其人の才徳と其居処とに由て位もあるものなり[25]」といつており，まさに，ジェファソンと同じような考えをもつていたように思われるのである。しかし，同時に，「農工商の三民は其身分以前に百倍し，やがて士族と肩を並べるの勢に至[26]」つているのであるから，三民はおのおのその身分を顧み，「銘々の身分に相応すべきほどの智徳を備え[27]」るよう心がけ，「政府は其政を施すに易く諸民は其支配を受て苦しみなきよう[28]」すべきことを説いているのである。彼が，そのように説くのを聞く時，我々は福沢といえども，封建社会におけるいわゆる固定的な身分という概念から完全に自由ではなかつたことも認めざるを得ないのである。彼がうだつのあがらぬ小藩の下級武士の次男坊として「門閥制度は親の敵」という時，そこには，たしかに，自然の貴族制への強いあこがれがあつたといえるのである。しかし，同時に，誇り高き武士として，三民に「よくその身分を顧み」「銘々の身分に相応すべきほどの智徳を備へ」るべきであると説く時，彼の自然の貴族制へのあこがれには，一つの限界があり，それが古い封建的な身分感覚に規制されたものであるといわざるを得ないのである。そしてそれは，彼の士族に固有の徳は遺伝するという考え方ともつながつていくのである。結局，福沢はアングロ・アメリカンの個人主義並びに実学主義の思想に共鳴しながらも，いわゆる身分制階級社会の打破を主張していたジェファソンの思想ほど徹底したものとはなりえず，その点にかんするかぎり，彼の考え方はアメリカ的というよりは，むしろ，階級秩序を是認するイギリス的考え方に近いものであつたといわざるを得ないのである。つまり，自

然の貴族制の採用という点からみるかぎり，彼は，極くひかえめな助言をしたものと考えられるのである。

次いで，「学制」に自然の貴族制の概念がとり入れられる第二の可能性についてみて行きたいと思う。それは，アメリカ留学生を通じての可能性である。彼等の多くは，福沢や小幡のようにアメリカの教育についてまとまつた著書をあらわすことこそなかつたけれども，自己の経験を通じているだけ，彼等が帰国後語つたことの影響には極めて大きなものがあつたと思われるのである。幕末から明治５年までの間に，アメリカに留学したものの数は予想以上に多く，一説には，約５００人に達していたといわれているのである。[29]

尾形裕康博士は，太政官日誌，もしほ草，民部省日誌，外務省日誌，中外新聞外編その他の資料を分析して，明治元年から５年に至るまでの海外留学生及び視察者の数を調べておられるが，それによれば，この期間に，アメリカ，イギリス，フランス，ドイツ，ロシア，ベルギー，中国，その他（不詳）の国々に留学したものは，全部で８１名を数え，そのうち実に約６１％の５０名もの留学生がアメリカに渡つているのである。次はイギリスであるがわずかに９名にすぎず，たとえ，尾形博士自らもいつておられるように，狭い範囲の資料にもとづくものであつたにしても，当時，留学生の多くが，どこへ渡つたか，おおよその見当はつくのである。このような留学生，特に，アメリカに渡つた者の中には，「学制」の制定に関して間接的にではあれ，関係を持つた考えられる畠山義成，富田鉄之助，新島襄といつた人々の名をあげることができる。[30] しかし，これらの人々の活躍に関しては後にふれることにして，ここではもつと別な側面から「学制」に対するアメリカ的考え方の反映を可能にしたと思われる中浜万次郎の場合をその一例として考えてみたいと思う。

周知のごとく，彼は，アメリカ留学生の第一号といえるのであるが，彼は，漁師の息子で他の四人の仲間と出漁中に遭難，１８４１年（天保１２年）漂流中をアメリカの捕鯨船ジョン・ハウランド号（John Howland）に救助され，ハワイへ向い，後船長ホイットフイールド（William H. Whitfield）に才能を認められ，船長の故郷マサチユーセッツ州フエアヘイブン（Fairhaven）につれてゆかれ，そこでホイットフイールドの養子として正規の学校教育を授けられたのである。[31] 最初，彼は生徒数３０名ばかりの当時アメリカにおける典型的な一教室一教師（one room one teacher）の小学校オクスフォード・スクール（Oxford School）に１６才で入学，ジエーン・アレンの教えを受けている。当時の仲間の１人の記憶していたところによると万次郎はクラスでいちばん成績ももの憶えもよく，ＡＢＣから高等数学まで学校で教えられたものには全てに対して興味を示していたといわれている。[32] まもなく彼はスプリング・ストリートのバートレット高等学校（Bartlet High School）に進学，数学の得意であつた万次郎は最優秀の生徒にのみ選択することが許されていた航海や測量等に関する程度の高い学科をも履習することが出来，[33] マサチユーセッツにおける植民地時代以来の花形的職業の一つであつた航海士[34]となるための基礎資格を取得することが出来たのである。高等学校卒業後，アメリカ合衆国とハワイ王国との間にとりかわされた条約（１８４２年）が成立して以来にわかに盛んになつた捕鯨産業の一大ブームの波に乗つて，万次郎は，再び捕鯨船に乗り組むことになるのであるが，航海術，測量法に関して基礎的訓練を受けていた彼は，まもなく一等航海士に昇任，次いで副船長にえらばれているのである。[35]

このようにアメリカにおいて一応の成功をおさめることの出来た万次郎も，日本とりわけ母のことが忘れられず，禁をおかして１８５１年に帰国し，幸運にも薩摩の島津斉彬や土佐の山内容堂（豊信）の庇護を受けることになり，とりわけ，彼の故郷である土佐藩においては，士分にとりたてられ，苗字帯刀を許され，名も中

浜万次郎と名乗ることを許され，藩の塾において，後藤象二郎や細川潤次郎ら[36]土佐藩の気鋭の武士達に英学の手ほどきをし，世界の地理や海外で得た知識の伝達を行つていたのである。時に中浜は２５才であり，後藤，細川は，それぞれ，１４才に１７才であつた。[57]

中浜は，はじめて斉彬にあつた時にも又禁をおかして入国したかどで長崎の奉行所において取調べを受けた時にもそうであつたのであるが，キリスト教に関すること以外は臆することなく答えており，特にアメリカには身分差のないこと，国の首長も能力と学識にもとづいて，人々の中から選ばれていること，人々は能力に従つて評価され処遇されていることなどを繰り返し報告しているのである。[58] おそらく，彼のこのような報告は，外国人であり，しかも下賤の出でありながら副船長にまで選ばれたことのある自らの体験に励まされてのことであつたように思われるのである。彼は，若手の気鋭の武士達にも，アメリカでは，徳と才能を基準として自らのリーダーを自らの手で決定することを，アメリカの公立小学校や高等学校において当然聞かされたであろう自然の貴族制に関する神話と共に話して聞かせたものと考えられるのである。しかして，中浜の話した制度上の相異に関する知識が，その他の航海や汽車や蒸汽船，電信機といつたものに関する知識と共に若い武士達の心をどれほどゆり動かしていつたかは容易に想像しうるところである。

その後，万次郎は幕府に召しかかえられ江川太郎左工門の下で，外国使節の書信の翻訳，洋式ボートの作製，彼自身の持ち帰つたボーディッチ(Natherniel Bowditch)の「亜米理加航海学書」（New American Practical Navigator）の翻訳等に従事している。[59] その後，勝海舟が伝習生頭役をつとめる幕府の海軍伝習所が開設されるや，その教授に任命され，アメリカの高等学校で学んだことや実際経験したことを基にして，航海術，測量術，捕鯨法等の伝習を行つているのである。彼が，後に，学制取調掛の一員として，実際に「学制」の起草にあたり，しかも，その委員長格であつた当時最高の仏学者であり英学者でもあつた箕作麟祥[60]や福沢諭吉らに英学の手ほどきをしたのもこのころのことであつたと考えられるのである。もつとも，後に，我国における屈指の学者となつたこれらの人々に，中浜がどの程度の影響力を持ちえたかは，はなはだ疑問となる点である。事実福沢などは，「漂流人が着くと其宿屋に訪ねて行つて聞いたこともある。其時に英語で一番難かしいと云ふのは発音で，私共は何も其意味を学ぼうと云うのではない，只スペリングを学ぶのであるから，子供でも宣ければ漂流人でも構わぬ，爾う云う者を捜し廻つては学んで居りました。[61]」と言つており，もしこの頃中浜の世話になつていたとしても，それをけつして高くは評価していなかつたように思われるのである。「天は人の上に人を造らず人の下に人を造らず[62]」といつた福沢のような人でも，当時，漁師あがりの中浜のような人から英語を学ぶことは，かなりの心理的抵抗があつたように思われるのである。このような武士としての誇り高い「やせがまん」的態度が，結局，前にもふれた彼の分限論や身分論となつてあらわれてくるものと思われるのであるが，それが又，事実を正視することの妨げともなつていたように思われるのである。このような身分差や国籍の違いその他の原因による事実認識のずれは，当時においては，いたるところで見受けられたことであり，[63] 異つた文化の交渉について理解することのむつかしさを物語つているのである。しかして，このような事実認識のずれは今我々の取扱つているようなテーマの場合，いつも問題となる点であり，絶えず留意すべき事のように思われるのである。

しかして，このような事実認識のずれが起りやすかつた一つの象徴的な実例として，咸臨丸の太平洋横断の壮挙に対する福沢の評価と咸臨丸に同乗した米国海軍大佐ブルツク（John Brooke）の評価とのずれ並びにそのような

ずれの中にあつて中浜が実際に果した役割についてみておくことは，本稿を進めて行くうえにもけつして無駄なことではないと考えるのである。すなわち，福沢は，咸臨丸の太平洋横断に関して，「比航海に就ては大に日本の為に誇ることがある[44]」として蒸汽船を見てから足掛け7年目，航海術の伝習を始めてから5年目で「少しも他人の手を籍らず出掛けて行こうと決断した勇気と云い其技倆と云い，是れだけは日本国の名誉として，世界に誇るに足るべき事実だと思う。[45]」と言い，幕府の斡旋で同乗したブルック大佐以下10名の海軍士官及び水兵達の助力は一切受けることなく太平洋横断に成功しえたと言いきつているのである。

しかし，ブルック大佐自身の当時の日誌の伝えるところによると，[46]実際は，日本人乗組員特に，士官達の無能ぶりは，実に惨憺たるもので，帆さえ十分にあげることができなかつたというのである。[47] 日本人乗組員の意地にもかかわらず，ブルック大佐が彼の部下を当直からはずし，船の仕事を拒否したとしたら船は沈んでしまわざるをえなかつたというのが，いつわらざる実情であつたらしいのである。[48] しかして，そのような事態においこまれた原因の一つとして，咸臨丸という，まさに自然の貴族制の原則が徹底して貫かれていなければならない近代的でかつ合理的であるべきはずの軍艦に当時の日本の身分制にもとづく封建社会のしくみが，そのまま持込まれていたことが指摘されているのである。しかして，それは，当時の日本の社会が「学制」の根底に流れていたと考えられる自然の貴族制(natural aristocracy)の考えとは相容れない異質の性格を有するものであつたことがわかるのである。すなわち，6人いた士官のうち何人かは，職務にかんして全くの無知であることがわかつていながら，軍艦奉行であり，艦長であつた木村摂津守は単に身分が低いという理由から，たとえ他に能力のある者（おそらく中浜のことをさすものと思われる）があつても，当直士官にはしたがらず，そのような時には，結局，誰れにも部署当直を割り当ることなくすまそうとしたと伝えているのである。[49] 木村艦長にとつては，船の上での実際的な能力よりも，陸上での階級の方が，はるかに重要なことであり，それさえしつかりと掌握していれば，あとは何とかなるはずと信じ込んでいたふしが見受けられるのである。[50] しかし，実際には，誰かが船を動かさなければならず，結局，ブルック大佐一行と中浜の手によつて船はなんとかサンフランシスコにたどりつくことができたというのが実情であつたらしいのである。しかして，「日本海軍にはどのような改革が必要であつたかについて意見をもつているのは，乗組員中，万次郎ただひとり[51]」であつたといわれているのである。しかし，そのかんじんの万次郎は，下賤の出というわけで，彼が日本人の水夫に命令したりすると，彼らは万次郎を帆桁に吊すぞとおどすしまつであつたのである。[52] おそらく，このような出来事がその原因の一つとなつたと考えられるのであるが，彼は，帰国後，すでに井伊大老によつて海軍伝習所そのものが廃止されていたこともあつて，すべての幕府の仕事から罷ぜられ，市井の人となつているのである。

以上のような極めて象徴的なエピソードからもわかるように，たしかに彼は好奇の眼をもつてみられ，彼の持つ新しい知識や技能は，求められながらも，そこには，おのずから種々なる限界のあつたことは確かなことであり，彼の影響を過大評価することは許されないことである。といつて，彼の持つ新しい知識と技能に対する必要が単に好奇心を刺戟するにとどまるものではけつしてなく，特に，若い気鋭の武士達にとつて，それがいかに切実なものとなつていたかは，彼が，幕府を追放されるとまもなく，薩摩藩に招聘され，更に土佐藩に改めて100石で召抱えられていることなどからも明らかなことである。

1864年（元治元年），薩摩藩が斉彬の洋学振興の意図を引継ぎ開成所を創設し，軍事教

科の教授を目標として，天文，地理，数学，物理分析，測量，航海，医学等が教えられることになつた際，石川正竜，八木玄悦，らと共に，中浜は，その開成所の教授として招かれているのである。[53] ちなみに，この薩摩開成所のカリキュラムは，軍事的目標をもつていたこと医学の分野を含んでいたことを除けば，当時のアメリカのアカデミーのそれと極めて似かよつたものであり，中浜にはなじみの深いものであつたのである。はじめ，この開成所においては，蘭学を学ぶものが多く蘭学生が６０名から７０名に達していたのに対して，英学を学ぶものは，僅かに８・９名に過ぎなかつたといわれているのである。しかし，この数少ない気鋭の英学志望の学生，つまり，中浜の門下生の中に，森有礼，吉田清成，鮫島尚信，寺島宗則，松村淳蔵，長沢鼎，畠山義成といつた人々が含まれていたのである。[54] 彼等は，中浜から英学の手ほどきを受けた後，英米に留学し，帰国後は，政治，外交，教育の各分野において，大きな役割を演ずることになるのである。特に我々は，中浜の薩摩における門下生の中に，森有礼と畠山義成が含まれていたことを忘れることは出来ないのである。もつとも，彼等が中浜に英学の手ほどきを受けたのは，彼等が英国に留学を命ぜられる前の１年に満たない短かい期間ではあつた。しかし，彼等が最初からアメリカにもあこがれを感じていたことは確かなことであり，後に薩摩藩と英国との関係が悪化した時，彼等は，ハリス（Thomas Lake Harris）を頼つてアメリカに渡る決心をしているのであるが，この決心の背後には，英国における友人達のすすめもざることながら，英国に旅立つ前に，中浜から，すでに聞き知つていた自由の国，アメリカ，森が「国家の政大小となく悉く萬民と謀り，公明正大の政事をなす[55]」国として理解していた新興国アメリカへ彼等の若い魂はひきつけられていたものと考えられるのである。ちなみに，中浜が開成所に招聘されて以後，蘭学から英学へとその中心が移つたといわれている。又この間に，彼が近代的薩摩海軍の建設に専門的知識と技能とをもつて協力していたことは，いうまでもないことである。[56]

他方，中浜の生れ故郷である土佐藩においては，吉田東洋の門下生であり，かつて，中浜の教えをも受けたことのある後藤象二郎ら開明派の台頭がみられ，１８６５年（慶応元年）には，彼等の力によつて開成館が建設されることになつたのであるが，その時，開成館奉行に任ぜられ，開設館の建設と経営を委ねられた後藤は「海軍力の強化，藩内資源の開発，国産品の貿易，及び知識の採用と教育など，藩の富国強兵を飛躍的に推進[57]」するため，開成館内に，軍艦局，税課局，鉱山局，鋳銭局，火薬局，医局，訳局等１１局を置くことにきめ，そのうち医局と訳局とに教育の機能を担わせているのである。特に，訳局は藩内における外国語教育センターともいうべきものであつたのである。しかして，その訳局の教官として，細川潤次郎をはじめとする中浜のかつての門下生が任命されたのであるが，それのみにとどまらず，１８６８年（明治元年）には薩摩藩における仕事をおえ江戸滞在中の中浜を祿高１００石で訳局の教官として迎えているのである。[58] それ以前においても，彼は，土佐海軍強化のため，軍艦の購入等に関して後藤らに協力していたのであるが，薩摩藩での仕事が，おわるや否や，中浜を江戸駐在のまま，土佐藩が全く破格の１００石で召抱えていることによつても当時，彼の力量を知るものにとつて，彼のもつ新しい知識と技能がいかに魅力あるものであつたかがわかるのである。

明治に入つて，幕末洋学の教授研究機関であつた開成所が開成学校と改称されて復興されるや，[59] 中浜は徴士として開成学校の二等教授に任命されているのである。後に，１２名の「学制」の起草委員が任命された際，そのうちの５名までが，この開成学校の教官であり，そのうちの筆頭格であつた箕作が，かつて，中浜の教えを受けていたことについては，すでに述べてきたところである。中浜が伊沢修二に英学の手

ほどきをし，後のアメリカ留学の素地をつけてやつたのもちようどこの頃のことであつたと考えられる。[60] しかし，中浜は，その2年前の明治3年（１８７０年），フランス，プロシヤ戦争の観戦を命じられ，大山巌，品川弥二郎らと渡欧しているのであるが，病いをえて帰国，帰国後，軽い脳溢血でたおれ，その後は，一切の公職から隠退しているのである。一説には，健康がすぐれなかつたことのほかに，一介の漁師上りでは藩閥政府内での立身がむづかしいと予知しての隠退であつたのではなかろうかともいわれている。[61]

以上，アメリカ留学生第一号としての中浜万次郎の場合を一例として，「学制」に自然の貴族制的考え方の採用される可能性についてみてきたのであるが，彼が，日本では，漁師という下賤の出でありながら，アメリカにおいて，正規の初等，中等教育を成功感をもつておえ，そこで習得した知識技能を実際生活に役立てることに成功し，社会的にも一等航海士というかなりの地位に進みえた最初の日本人であつただけに，彼が「学制」の制定に直接間接に関係のあつた人々，すなわち箕作麟祥をはじめ畠山義成，森有礼，後藤象二郎，福沢諭吉，細川潤次郎といつた人々と交り，彼等に英学や地理や航海術等の手ほどきをした事実のあることは，たとえ間接的な影響にすぎないものではあつても，「学制」にかなりのアメリカ的考え方の採用される可能性をもたらしたものと考えられるのである。すくなくとも，まさに大きく動き出そうとしていた維新前後の日本の社会において，自然の貴族制への熱つぽい夢の醸成に無視しえぬ影響を与えたものと考えられるのである。ちなみに，中浜の門下生には，以上あげた人々以外にも，尺振八，西周，中村正直，榎本武揚，大鳥圭介といつた，明治新文化を築き上げた錚々たる人物の名が多数含まれているのである。[62] もつとも，誇り高く「やせがまん」の強い武士学者達が一介の漁師上りの言うことをどの程度まで信用していたかに関しては，疑問をさしはさむ余地は充分にある。しかし，彼の持つていた実際的で，かつ先駆的な知識技能が強く求められていたことは確かなことであり，彼の持つ知識が，そのまま，彼の知識として用いられることはなかつたにしても，より社会的に重きをなす人々の耳に入れられた時，それらの人々の頭脳をいたく刺戟し，社会的にも意味のある知識となり，発言となつていつたものと考えられるのである。誇りが高く乃公意識の極めて強い功をあせる傾向のあつた気鋭の若手武士達の性格を考える時，彼等の耳に何かしら新しい知識がふき込まれた場合，どのようなことになるか，容易に推察されることである。この中浜と武士達との間に当然あつたろうと推察される関係は，雇外国人と武士達の間によりはつきりした形をとつてあらわれてくることなのである。「ベルツの日記」が，その間のいきさつを象徴的に伝えている。つまり，ベルツは，日本医学の進歩のために偉大なる貢献をしたドイツ人お雇い教師であつたのであるが，彼は，このような意識のくい違いのために，しばしば不快な思いをさせられているのである。彼は，大学医学部内に自主を目指す傾向のあることに気付き，その重要性を認識し，常に，彼自らそのような自主性を促進するよう努力し，再契約の際には，たびたび学部当局に，日本人のみでやつてみてはどうかとすすめていたというのである。ところが，学部当局はそのたびごとに留任するように押しつけ，必要なときには利用しておきながら，あらゆる機会に，ベルツを含む外人教師を無視する態度をとつていたというのである。このような大学当局の態度にがまんができず，彼は勤続２５周年記念祝賀会を断念して大学当局に辞表を提出するに至つているのである。[63] この辞表は受理されることはなかつたが，この種の大学当局のいやがらせともみえる不愉快かつ不名誉極りない取扱いは，その後も止むことなく続けられていたのである。ベルツは離任に際して菊地文部大臣の主催する送別会にリースやヤンソンと共に招かれているのであるが，その送別会

において受けた印象を彼は，

「何のことはない，なごりにたらふく食べさせるという感じである。文相はわれわれ三人に簡単な宣言を下したが，ひとりひとりには言及すらせず，またわれわれ各人が日本のために尽したことなどについては一言も述べなかつた。[64]」と記しているのである。

しかもその送別会の翌日の明治３３年７月１１日には，天皇臨席のもとに，大学の学年終了式と卒業証書授与式が行われているのであるが，その際に，退職する外国人教授達は，天皇に紹介されることすらなかつたのである。しかしてベルツは，このようなやり方を新日本のため，全く誠心誠意尽力し，その功績も否定できない人々に対する，人権を無視した取扱いであるとして，ひどく感情を害したといつているのである。[65]

しかし，よく考えてみれば，このような，主として下級武士あがりの政府当局者のとつた態度は，当然といえば当然過ぎる態度でもあつたのである。というのは，西洋の知識技術を学ぶこと自体がそもそも攘夷のためであり，

「すめらをのはじをしのびてゆく旅は
　　すめらみくにのためとこそしれ[66]」

という伊藤博文の一首にみられるように恥をしのんでの行為であつたからである。それは，ハーン（Lafcadio Hearn）の言葉を借りるならば，万事が「敵自身の力をかりて，敵をたおし，敵自身のいきおいをかりて，敵を征服する[67]」柔術の精神に支えられたものであり，欧米教育制度の移入の場合についてみても「ドイツ，フランス，アメリカの各国で得られた最良の成績を，徹底的に研究した上で公立学校制度を[68]」設立したのは，けつして単に外国の制度を鵜呑みにしたものではなく，ある一つの目的をもつて，「自国の諸制度に完全に調和するように手加減を加えたもの[69]」であつたからである。つまり，相手の力はどこまでも認めながら，その力をあくまでも利用しようとする強烈な主体性が彼等の魂のそこにはひそんでいたといえるのである。それはまさに「生きた器械」を買うという態度にも通ずるものであつたのである。幕末，伊藤博文，井上馨，山尾庸三らが長州藩から洋行するとき，藩の重役であつた周布政之助が，横浜貿易商大黒屋六兵衛の番頭であつた佐藤貞次郎をひそかに呼んで，「こんどヨーロッパから生きた器械を買い入れたい[70]」といつて，かれらの洋行の周旋を頼んだといわれているが，お雇い外国人は，まさに生きた器械とみなされていたわけである。

このような状況においては，ともすると，何が実際に輸入されたのか見失なわれがちであると共に，「生きた器械」が持ちこまれたことそれ自体すら忘れ去られがちであり，ましてや「生きた器械」がどのような働きをしたのか正しくとらえることは極めて困難なこととなつているのである。しかして「生きた器械」の働きを正しく理解し，正しく評価するためには，以上みてきた様々な意識のずれによるゆがみをまずもつて修正しておかなければならないのである。

その意味においても，中浜の影響は，けつして過大評価されてはならないと同時に，従来のように，過小評価されてもならないのである。しかして，中浜はその他の無名の記録を残すこともなかつたアメリカ帰りの留学生達と共に，開かれた社会，自然の貴族制の夢がある程度まで達成されていた社会の自由な空気を持ち込み，すくなくとも「学制」制定のために必要な熱つぽい啓蒙的なメンタルクライメートを作り出す上に大きな働きをしていたといえるのである。

第二節　フルベッキと「学制」

(1)　フルベッキと大隈重信との出会い
長崎時代の門下生

次に，我々は，いよいよ「学制」に自然の貴族制の概念の導入される最大の可能性をもたらした第三の経路について見て行きたいと思う。第三の経路は，第一，第二の経路とは逆の潮流

によるものであつた。第一，第二の経路による可能性が，中浜によつて生れ，福沢によつて代表されるものであるとするならば，第三のそれは，フルベッキ（Guido Fridolin Verbeck）によつて生れ，彼自らによつて代表されるものであつたといえるのである。しかして，中浜の場合，漁船の遭難という彼の内心とは直接かかわりを持たない，外的運命のいたずらともいうべきものによつてたまたまアメリカへ連れ去られることになつたといえるのであるが，これに対してフルベッキの場合は，彼の内心に宿る運命の星に導かれて，はるばるオランダからアメリカを経由して日本へとやつてきたといえるのである。

中浜の場合，彼の内心にはかかわりなく，彼をとらえ，彼を連れ去り連れもどした外的な力とは結局マニフエスト，デステイニー（manifest destiny）という言葉で表現される運命であり，それは１６３０年代にイギリスの商人化した農民，あるいは土地に強い執着をもち，土地指向的になつていたイギリスの商人達によつて北アメリカ大陸の東北海岸に持ち込まれて以来，西へ西へと向つて急速に膨張することを運命づけられていた一つの巨大なる力であつたのである。それは，アメリカ資本主義という名で呼ばれていたものであるが，その巨大な波が中浜を連れ去つた時，その太平洋上におけるシンボルは中国貿易と捕鯨産業とであつたといえるのである。これに対して，フルベッキを日本に導いた力は，中浜をその中に巻きこみほんろうした外的な力とは本質的にその性格を異にする力であり，より内的な力であつたといえる。

それは，アメリカ資本主義の膨張と呼応しながら，各派が競争でアメリカ全土に燎原の火の如く広がつていつたプロテスタンテイズム諸派の一派であり，カルヴイニズムを奉ずるアメリカにおけるオランダ改革派教会（Dutch Reformed Church in America）の教えであり，そのもたらす啓示の力であつたといえるのである。資本主義の発達とプロテスタンテイズムの倫理とは，シンプソン（Alan Simpson）も主張しているように[71]，本来無関係なものであつた。しかし，プロテスタンテイズムという「種」にとつて最も肥沃な「土壌」は同じ教義を信奉しうる者同志が，しばしば，一堂に会して互いに批判しあい教化しあう機会を持ちうる程度の余裕があり，その上に，そのような集りで安らぎを得る必要がある程度において不安といらだちを覚える人々の集るところであつたといえるのである。しかして，そのような人々の多く集まるところといえばそれは，競争のはげしい資本主義社会の担い手たる中産階級の発生していたところといえるのである。そのような意味において，両者はとかく結びつきやすく，それ故にこそ，互いに踵を接して，同時に広がる傾向をもつていたといえるのである。しかして，この波長を異にする，本質的には，互いに相容れない性格を有するこの二つの波は，たまたま相手の力を強めあい，西に向つて急速に波及しつつあつたのであるが，ついには，日本列島の岸辺をも洗うまでになつていたといえるのである。しかして，中浜とフルベッキは，このヨーロッパで起りアメリカ大陸で増幅された二つの大きな波，つまり外的な波と内的な波とによつておし流され，それぞれ，アメリカと日本の岸辺に打ちあげられた最初の人々であつたということができるのである。中浜は，他の留学生達と共に教育の分野においては，日本の教育機関に英学とともに，航海術，測量術その他の商業資本主義から産業資本主義へと移行しながら膨張しつづけていたアメリカ資本主義のおとし子ともいえる教科目をもたらし，福沢らと共に，実学主義的教育思想の普及に貢献すると共に開かれた社会の自由な雰囲気を持ちこむことになつたのである。これに対して，フルベッキは，一体，何をもたらしにやつて来，実際に後に残していつたものは何であつたのであろうか。

「学制」の審議及び公布にあたつてそれを強

力に支持したのは，佐賀藩出身の参議大隈重信であつたといわれているが，[12] その大隈自身をはじめとして，何人かの人々が，フルベッキは「学制」の制定を建白し，その起草にあたつた人々のうちの１人であると明言している。[13] しかし何故に，オランダ改革派教会の宣教師として来日したはずのフルベッキが「学制」の制定に協力することになつたのであろうか。又彼が「学制」の制定に協力したことが事実であるとして，どのような協力をしたのであろうか，又なしえたと考えられるであろうか。これらの疑問に答えるために，まず，彼の生い立ちからみて行きたいと思う。

自らのことについては，まとまつたものを何一つ書き残すことのなかつたこのオランダ改革派教会の宣教師フルベッキについて正確な知識を得ることはけつして容易なことではない。しかし幸いにも，フルベッキと同じ教会の教会員で，フルベッキの斡旋で日本にも来たことのあるグリフイス（William Elliot Griffis）が，「日本のフルベッキ」（Verbeck of Japan）[14] という題でフルベッキの伝記を書き残しているので，以下，この唯一のフルベッキの伝記にもとづいて，彼の生涯を，「学制」との関連において概観してみたいと思う。グリフイスは，いうまでもなく，有名な「皇国」（Mikado's Empire）の著者であり，「皇国」以外にも日本に関するおびただしい数の著作をものした大の親日家であり，知日家でもあつたが，日本をよく観察していたその眼をもつて，フルベッキの伝記を著しているのである。その際彼は，単に日本とアメリカのみならず，フルベッキの生れ故郷であるオランダにまで足をのばして，フルベッキに関する資料を集めたといわれているのである。

グリフイスの「日本のフルベッキ」によれば，１８３０年にオランダで生れ，１８９８年に日本で死ぬまでのフルベッキの６８年にわたる生涯は，極く大まかに，しかし截然と三つの時期にわかつて考察することができる。すなわち，その第一期は，１８３０年から１８５２年までのオランダにおける２２年間であり，その第二期は，１８５９年までのアメリカにおける７年間であり，第三期は，１８９８年までの日本における３９年間である。日本における３９年間の生活は，更に三つの時期に分つて考えることができる。その第一期は，１８６０年から1869年までの日本にきてから最初の９年間であり，長崎時代ともいうべき時期である。その第二期は，１８７５年までの７年間で，日本政府の顧問時代ともいうべき時期であり，最後の第三期は，１８９８年に永眠するまでの２３年間であり，本来の宣教師として聖書をはじめとするキリスト教に関する様々な翻訳と伝導活動に専心した時代である。我々に直接関係のある時期は，日本時代の前半，すなわち，長崎時代並びに日本政府の顧問として活躍した時代であるが，この１６年間の活動の性格を知るためには，どうしても，彼のそれ以前の生活についても概観しておく必要があるように思われるのである。

フルベッキは，１８３０年オランダのユトレヒト州（Utrecht）のザイスト（Zeist）に生れている。両親は，チエコの宗教改革者であつたフス（Johannes Huss）によつて創設されたモラヴイアン教会（Moravian Church）の熱心な信徒であり，彼はこの両親の強い宗教的影響の下に育てられたといわれている。彼は，強い国際的な雰囲気をもつたオランダの町ザイストのモラヴイアン系の学校で，初等教育を受けたといわれているが，彼の受けた初等教育がいかなるものであつたか正確につかむことはできない。しかし，内田正雄訳の「和蘭学制」によるならば，[15] その頃のオランダの小学校には二つの種類があり，一つは

素読，習字，算術，文章，蘭語の大意，地理学の大意，歴史の大意，理学の大意，唱歌等の学科を教える普通の小学校であり，いま一つは，その他に，

外国語学の大略，算術の大意，農学の大意，体術，図画，女子の手業等の学科を教えるや

や大なる小学校であつたとされている。フルベッキは小学校時代，すでに，母国語であるオランダ語のみならず，ドイツ語，英語，フランス語等の外国語についても学び，どの言葉も同じように巧みに駆使することができるようになつていたといわれているところから，彼の学んだザイストのモラヴィアン系の小学校というのはやや大なる小学校の方であり，内容の充実した学校であつたと考えられるのである。ちなみに，当時のオランダの小学校においては，植民地行政官や外国貿易に従事する商人達の子弟が外国から送り込まれてきたり，又は反対に外国にいる両親のもとに子供達が送り出されるといつたことがひんぱんに行われており，オランダの町の国際的雰囲気は小学校教育にまで滲透しており，フルベッキの天才的ともいえる語学力を刺戟しこれをはぐくみ育てるための格好の条件を作り出していたといえるのである。ちなみに，彼の語学力には，おどろくべきものがあり，後に日本に来てからも，この能力はいかんなく発揮され，長崎当時すでに，貝原益軒の著書を座右からはなさなかつたといわれるまでになつていたのである。

小学校教育を受けてから後，彼はユトレヒトへ出てそこのポリテクニック，インステイテユーション（Polytechnic Institution）において，土木を中心とする工業技術を身につけているのである。ところでこのポリテクニックインステイテユーションというのは，「和蘭学制」によると，「諸術学校」と訳されており，それは，「百工製造学とならんと欲するもの，並に其学の原理及術業を上等平人学校五年の教授よりも尚深く研窮せんと欲する者」[76]のための学校であつたのである。なお，上等平人学校というのは，高等一般普通教育を施す中等教育機関であり，修業年限三年のものと，五年のもの二種類があつたのである。

三年制の上等平人学校においては，

算術；理学；化学の大略；植物学；動物学の大意；経済学の大意；帳面記録法の大意；地理学；歴史；蘭語；仏語；英語；独逸語；美麗に書すること；画及図を引くこと；体術等の諸教科が教えられ，

五年制の上等平人学校においては，

算術；重学の大意（原理並に実用の部）及器械学；製造学；理学及其肝要なる実用の部；化学及其肝要なる実用の部；金礦，土質，植物学の大意；宇宙学の大意；和蘭政府及州邑体裁の大意；経済学及経済表殊に和蘭本国より其海外領分；地理学；歴史；蘭語及文学；仏語及文学；英語及文学；独逸語及文学；商法学及品物鑒定並帳面記録法；美麗に書すること；画及図を引くこと；体術の諸教科が教えられることになつていたのである。[77] これらの上等平人学校は政府により諸州郡の最も便利な地方に15ケ所設置されており，そのうちすくなくとも，5ケ所において5年制の課程が設けられていたといわれるが，フルベッキは，この5ケ所に設けられていた上等平人学校のうちの一つに学び，その後，ポリテクニック・インステイテユーションに進学したものと思われるのである。[78] 5年制の上等平人学校においては，自然科学系の諸教科に重きがおかれ，特に，その実用面が重視され，外国語は，ラテン，ギリシヤ語に代つて近代外国語が教授されていたことがわかるのであるが，ここに，オランダ人の抜け目のない現実を重んずる性格があらわれているといえる。

フルベッキは，このような実用を重んずる自然科学に関する基礎知識を身につけ，得意の語学，つまり，フランス語，英語，ドイツ語に更にみがきをかけた後，ポリテクニックインステイテユーションに入り，土木に関する専門的知識技能を身につけたことになるのである。

ところで，このポリテクニック，インステイテユーションは，(1) 建築家（平時兵備に関かわらざるもの） (2) 造作家

（土木匠）(3)造船家，(4)器械家，(5)鑛山家等の技術者にならんと欲するもののための学校であり，そこで教授されていた諸教科目をあげるならばそれは次のようなものであつた。

高等数学；弧三角法及高等測学；図測学及其実用；微分積分；測地法水平を定る法及測量；重学原理；同実用部；器械学理器械学講義；器械製造学；実用窮理学；化学（実地適用及分析法）；化学製造；近時製作場の学問；山物学及土質学；実用土質学及鑛山学；金属学；水利学道路学；橋梁轍道の布置；建築学；造船学；畫学及直線図学の諸科に適用する部；諸器械及旋盤実地法；器械の雛形を造る法；経済学；商法；会計法測（水理，鑛山，諸製造等に関係する部）(79)

それは，明らかに，商業資本主義から産業資本主義への移行期において，大量に必要とされはじめていた技術者養成のための学校であると同時に，産業資本主義社会の担い手たる新しい型の中流階級の拡大再生産のための学校であつたともいえるのである。

このようにして，フルベッキが，日本とも早くから国交のあつた唯一の西欧の国，オランダで生れ，その国際都市であつたユトレヒトにおいて，得意な語学にみがきをかけ，更に，これから工業化を志ざそうとする国にとつてまさに，のどから手が出るほどに渇仰されていた工業に関する新しい知識技能を身につけていたことは，彼が幼い頃から，強いプロテスタンテイズムの影響の下に育てられ，いかに異質の文化圏に投げだされても，けつしてくじけることのない，いわゆるリースマン(David Riesman)のいう典型的な内部指向型の性格をもつようになつていたことと共に(80)我国における彼の驚くべき活躍を考える上に見落すことのできない重要な条件を作りあげていたといえるのである。

その後，フルベッキは1852年すなわち，22才の時，能力があり，大志を抱くオランダの青年なら誰しもが一度はあこがれたといわれる海外生活にあこがれるようになり，自分の土木技師としての技術を自由の新天地で思う存分に生かそうという夢に導かれ，自由と希望の神話のヴエールにつつまれた新しい世界アメリカに渡ることを決心したのである。彼の決心をうながしたいま一つの動機は多くのアメリカ移民がそうであつたように，経済的なものであり，フルベッキ家の没落によるものであつたともいわれている。最初，彼はウイスコンシン州のグリーンベイの近くのとある田舎町に身内の者を頼つて落ちつくのであるが，そのような田舎町に彼の技術をいかせるような職場がみつかるはずもなく，まもなく，彼は土木技師として鉄道関係に職を求めてブルックリン(Brooklyn)へと移住し，更に，アーカサンス(Arkansas)州へと移住しているのである。そこで，非常に数多くの移民がおびやかされた得体の知れない熱病に彼自身もとりつかれ，一心に神の救いを求めて祈り，奇蹟的に救われるという宗教的体験を得ているのである。しかしてその時にかわした神との約束を忠実に果すため，彼は，その後宣教師として自らの一生を伝道事業に捧げる決意をかため，1855年に，ニューヨークのオーバーン(Auburn)にある長老派系(Presbyterian)の神学校に入学しているのである。かくして彼の心の中に幼い頃，両親の手ですえつけられたジャイロスコープは，19世紀のアメリカの風土的，社会的条件の下で，力強く回転しはじめ，彼の内部指向的性格は，大いに助長され，強化されゆるがぬものとなつていつたのである。(81)

彼はこのオーバーンの神学校を4年後の1859年に卒業しているのであるが，彼が神学校を卒業したちようどその年に，日米修好通商条約が締結され，日本がやつと国を開いたというニュースが入り，オランダ改革派教会の海外伝道局(The Foreign Board of The Dutch Reformed Church)は，早速，日本に，オランダ系アメリカ人を一名宣教師として送りこむ計画を立てていたのである。フルベッキは，すぐさまこれに応募し，採用されたのである。その年のうちに正式にオランダ改革派教会の宣教

師に任命（ordained）されたフルベッキは，フィラデルフィア出身のマリヤ・マニオン（Maria Manion）とあたふたと結婚し，他の宗派から日本に送られることになつていた何人かの宣教師とほぼ同じ時期に一団となつて，1859年5月7日 ニューヨークを出帆，一躍，長崎へと向かつたのである。ちなみに，マリヤは当時，カトリック教徒であり，フルベッキに導かれて改宗した最初の人であつた。

この最初に日本にやつてきた一行の中には後に"Familiar phrases in English and romanized Japanese,"（1860）を著わして有名になつた，イギリス系アメリカ人で米国聖公会（Protestant Episcopal Church）の宣教師であるリギンズ（John Liggins,）；同じく，米国聖公会の宣教師で日本聖公会の生みの親となつたウイリアムズ（Channing Moore Williams）[82]。長老派教会（Presbyterian Church）の宣教師であり，又医者でもあつた，そしてヘボン式ローマ字の創始者でかつ明治学院の初代総理でもあつたヘップバーン（James Curtis Hepburn）；改革派教会（Reformed Church）の宣教師で，アメリカ公使館付牧師となり，又横浜運上所その他の学校で，英語教師となつて，大島圭介，佐藤昌介，小野梓，井深梶之助，植村正久といつた人々を育てたブラウン（Samuel Robbins Brown）；医療宣教師として来日，大学東校の医学教師となり，セメンエン（虫下し薬）の創始者で，福沢諭吉とも親交あつかつたシモンズ（Duane B Simmons）[83] らが含まれており，フルベッキはこれらの宣教師達とある時には協力しながら，又ある時には競いあいながら，布教事業をはじめることとなつたのである。フルベッキが長崎についたのは，1859年11月7日であり，彼が27才の時であつた。

当時日本においてはキリシタン禁制はいまだ解かれておらず，彼の布教活動には筆舌につくせぬ困難が伴なつたといわれている。[84] そこで，彼は，日本人が熱心に学びたいと思つていた英語，その他の教科を教授することからはじめようと考え，聖書をテキストとして，英語塾を開いていたのである。はじめ，生徒はただの2名にすぎなかつたといわれている。[85] 何礼之の私塾に出講したのもこの頃のことであつたとされている。[86] しかし，まもなく（1864年）彼は，長崎の幕府直轄の英語学校「済美館」に英語教師として招かれ，その二年後の1866年には大隈重信や副島種臣等若手の佐賀藩士達が，藩主鍋島閑叟（直正）を説得して長崎に開設させた[87] 佐賀藩の英語学校「致遠館」にも頼まれて出講するようになり，彼は，これらの二つの学校で，新約聖書及びアメリカ合衆国憲法を主たるテキストとし，その他のことについては，請われるまま，彼が知つていることは何でも教えたといわれているのである。[88]

このフルベッキが，常に新約聖書とアメリカ合衆国憲法を主たるテキストとして使つていたことに関して，「日本人とアメリカ人，文化交渉の百年」（Japanese and Americans, a Century of Cultural Relation）の著者シュワンテス（Robert S Schwantes）はフルベッキが，自らをアメリカ人として自覚しそのことに誇りをもつていた人，すなわち（Self-Conciously Proud of his Amelicanism）であつたといつているが，これは極めて当をえた評価であるといえるのである。[89] というのは，彼が，夢を抱いてアメリカに渡つたということの他に，アメリカに渡つてからも，自らの名前をアメリカ風に改めたり，オランダ人らしいアクセントをなくすために大変な努力を重ねたりしており，アメリカ人になりきるためにすくなからず骨を折つていた事実があるからである。アメリカにおけるオランダ改革派教会（Dutch Reformed Church in America）に属するかぎり，アメリカ人であることを特に強く教会から要請されていたという事実もあるにはあつた。しかし，彼の場合には，進んでアメリカ人になりきるための努力をアメリカのオランダ改革派教会に属する前から行なつていたことも又事

実である。従つて彼が最初からオランダ人としてではなくオランダ語も話せるアメリカ人宣教師として一般に知られていたことはいうまでもないことである。

このように彼が，オランダ語も話せるアメリカ人宣教師として知られるようになつたことは，彼のその後の活躍を考える上に極めて重大なことといえるのである。というのは，すでに藩の蘭学寮等でオランダ語をかじつていたものにとつて彼のような存在は実に貴重なものとなつていたからである。事実，当時，大隈重信の出身藩である佐賀藩あたりにおいても，万延元年の遣米使節団新見豊前守に随行した佐賀藩士，小出千之助の帰国等に刺戟され大隈重信をはじめとする藩の蘭学書生の間には，にわかに，英学を学ぼうとする機運が高まりつつあつたのである。(90)このような時期において，フルベッキと大隈との出会いがあつたことははなはだ意義深いものであつたといわざるを得ないのである。

フルベッキは，１８６８年にオランダ改革派教会の海外伝道局の理事長フエーリス(Rev. Dr. John Masson Ferris)あてに出した手紙の中で，「二年余り前に，私が教えていた生徒の中に，大隈と副島という大変有望な青年が二人いました。彼等は，私と共に新約聖書と我国の憲法の大半を読破いたしました。」(91) と大隈と副島とについてふれているのである。大隈の勉強法は「原書の一字一句を訳読するよりは一篇一章の大要を摑むにあつた」(92) といわれ，特に，フルベッキが日本語に上達していたので，大隈は，自ら読みたいと思う本を探し出し，フルベッキにそれを訳させ，聞いていたといわれている。かくして，大隈は，フルベッキと共に，三年間にわたつて，アメリカの憲法，イギリスの憲法史，萬国公法などを読了し，その他，地理，歴史，法制，経済，数理についても学び，三年間というもの「フルベッキは大隈，副島さん等の専任教師といつてよい位」であつたといわれているのである。(93) かくしてフルベッキと大隈との間には，きつてもきれない関係が生ずることになつたのである。ここで彼等の関係を「学制」の起草及び公布との関連において検討するにあたつて，いささか伝説めいた話ではあるが，無視しえない一つのエピソードがあるので，それをまず紹介しておきたいと思う。それは，早稲田大学の政治学教授の吉村正博士が，昭和２６年にアメリカに渡つたさいに，ブラウンローという人から聞いたという話である。

吉村博士の語るところによると：

『ブラウンロー氏は元ワシントン市長をやつた人で，アメリカ行政界での大立物です。同氏は若いころ三度日本に来たそうです。はじめは，伊藤博文とか牧野伸顕とかいうような人にばかり会つた。ところが時事新報の川面という人が，「あなたは日本にきて伊藤とか牧野とかいうような人々ばかりに会つてはダメだ，大隈さんに会わねばいけない」というので，大隈さんにあつたそうです。ところが，そのとき大隈さんのいうには「自分は若いときに英語をならつた，そのときテキストとして用いたのは聖書であつた」そこで，大隈さんが先生（フルベッキ）に向つて何か政治に関するものを読みたいといつた。するとそのとき，テキストとして先生が使つたのがトマス．ジエフアソンの執筆したあの「独立宣言」であつた。そこで大隈さんは，アメリカの民主主義に興味をもつようになつた。ところがジエフアソンは，一方において政党をつくり，他方において民主政治を育てていくために，ヴアージニヤ大学をつくつた。そこで大隅さんも一方において政党をつくり，他方において早稲田大学を建設した』(94) といつたというのである。つまり，後になつて，大隈が改進党を結成し早稲田大学を設立したのは，ジエフアソンが，リパブリカン党を結成し，ヴアージニヤ大学を設立したことにならつたのだといつているのである。同様のことは，早稲田大学の大隈研究家である鹿野政直氏も，「大隈重信は，ヴアージニヤ大学を創立したトマス．ジエ

フアソンを模範としたというが，こうした足跡によつても，かれは，近代日本の政治家にはめずらしく教育にふかいかかわりをもつていたことがわかる」(95) とジエフアソンの大隈に対する影響を認めておられるのである。このようなエピソードから，我々はジエフアソン→フルベッキ→大隈の間には一連の思想的影響関係があつたとみることができるのである。ということは，当然フルベッキはかなり深くジエフアソンを知つており，ジエフアソンの自然の貴族制の考えについても理解していたのではあるまいかという仮説を立てることも出来，その仮説が立証されるならば，「学制」に対するジエフアソン流の考え方の影響は動かしがたいものとなり，「学制」のなぞの一部が解明されることになるのである。しかし，以上のようなエピソードをそのまま無条件で信用してしまうわけにはいかない一連の事実もあり，より確かな資料によつて立証することは現在のところ容易ならざることのように思われる。しかし，それにもかかわらず，これらのエピソードの生れ出る可能性は充分あつたといわざるをえず，以下，その可能性について吟味してみたいと思う。まず，上のようなエピソードをそのまま無条件で信用してしまうわけにはいかない一連の事実からみて行きたいと思う。

まず，大隈とブライアンとの関係である。

１９４０年（昭和１５年）に当時早稲田大学の名誉教授であつた伊地知純正が英文で書いた大隈重信の伝記によるならば，(96) それは日露戦争に日本が勝利をおさめて以来，多くの外国の政治家，学者，報道関係者達が日本を訪れるようになつたと伝えているのであるが，その際，彼等の多くは，維新以来新日本の建設に大きな役割を果した大隈重信を早稲田に訪ねることを忘れなかつたといつているのである。しかして，そのような数多くの大隈を訪ねた外国人客の中にブライアン (William Jennings Bryan) (97) という一人の著名なアメリカ人政治家も含まれていたのである。彼は民主党から大統領候補にも幾度か指名されるほどの大物政治家であつたのであるが，彼が，１９０６年（明治３９年）１０月に大隅を早稲田に訪ねた際，彼は大隈に請われるまま，早稲田大学の学生達に一場の講演を行つているのである。

講演の後の午餐会の席上で，ジエフアソンの崇拝者となつていたブライアンは，大隈の功績を称える目的で，大隈とジエフアソンの比較を行い，大隈がジエフアソン同様，政治と教育の双方に深い関心を示しジエフアソンがリパブリカン党を結成し，アメリカ政治の民主化に貢献したのに対し，大隈も改進党を組織して，日本の政治の民主化に大きな貢献をなし，又ジエフアソンがヴアージニヤ大学を設立したように，大隈も又早稲田大学を設立した事実を指摘して，大隈がアメリカのジエフアソンに匹敵する偉大なる政治家であることを強調しているのである。(98) ブライアンはどうしてこのように比較を行つたのであろうか。彼は，すでに大隈が，ジエフアソンに興味を持つていたことを知つていてこのような大隈讃美を行つたのであろうか。筆者は今のところこの疑問に答えうる確たる資料にめぐりあつておらず，ブライアンは，結局その場かぎりの思いつきを述べたにすぎないとも考えられるのである。

ブライアンは，その際，ジエフアソン全集を寄贈することを約して別れを告げ，帰国後，その約束を忠実に守り，ジエフアソン全集を送つてよこしたといわれているのであるが，このブライアンが大隈に贈つたジエフアソン全集こそ，リツプスコームとバー (Andrew A. Lipscomb & Albert E. Bergh) の編集した全２０巻にのぼる全集であり，(99) ブライアンの来日する二年前の１９０４年に，トマス，ジエフアソン記念会 (Thomas Jefferson Memorial Association) によつて出版されたものであつたと考えられるのである。この全集の出版はアメリカにおいても画期的な事業であり，この全集の出版によつてジエフアソンに

対する一般的な関心も高まり，又，ジェフアソン研究も本格的におし進められるようになつたものなのである。しかして民主党のブライアン自身が共和党の党主であつたジェフアソン崇拝者となつたのも実は，この全集の出版に影響されてのことであつたように思われるのである。とすると可能性の点からいつて，実際に大隈がジェフアソンに多くを学んだとしても，それは，むしろブライアンに会いブライアンに賞讃され彼にジェフアソン全集を贈られて以後のことであつたのではあるまいかとも考えられるのである。つまり先にのべたいささか伝説めいたエピソードも結局は，ブライアンの演説をもとにして発展したものではなかつたろうかとも考えられるのである。特に，大隈が「大ぼらふき」とか「大風呂敷」とか呼ばれ「屢々彼の門戸に出入する者は，往々同一の談話を珍らしそうに幾度も繰返えされたことがあり，更に最も驚くべきは，前回訪問して，此方から述べたる意見が，次回の訪問には，彼の意見として，此方に向つて講釈せられることがあつて，餘りにもその消化が速かにして，その効果の現金なるにびつくりする如きも，皆無ではなかつた」(100) といわれるような性格の持主であつたことを考えると，ジェフアソンと大隈に関するエピソードの伝説的要素は，かなり強くなるように思われるのである。

もちろん，リップスコームとバーのジェフアソン全集以前にも，１８２１年には，ランドルフ(Thomas Jefferson Randolph)によつて，更に，１８９２年から１８９９年にかけては，フォード(P.L. Ford)らによつてそれぞれ編集された全集(101)が出されており，又ジェフアソンとヴアージニヤ大学に関しては１８５６年にケイベル(Joseph C. Cabell)の「ヴアージニヤ大学の初期の歴史」(Early History of the University of Virginia)が出版されている。しかし，何といつても，ジェフアソンが大いに脚光をあび本格的に研究の対象とされるようになつたのは，リップスコームとバーの全集が出されてから後のことであり，２０世紀に入つてからのことであつたのである。しかして，１９世紀の３０年代頃から，１９世紀の中頃においては，むしろジェフアソンの影は，むしろ一時薄くなつており，大隈がブライアンに会う前にジェフアソンについて深く知りうる機会は，極めて限られたものであつたといわざるをえないのである。

特に我々が今問題としている１７７９年のジェフアソンの教育法案は，ランドルフの全集にもおさめられておらず，それが印刷にふされ活字になつて一般の人々の目にもふれるようになつたのは，フォードの全集が出されて以後，つまり１９世紀も９０年代になつてからのことであつたのであり，従つて，フルベツキ，大隈を通じて，ジェフアソンの考え方が「学制」に影響する可能性がたとえあつたにしても，1779年のジェフアソンの教育法案の全文がそのままフルベツキによつて持ち込まれ直接参考とされるといつた形における可能性は，ほとんどなかつたとみてさしつかえないのである。

しかし，それにもかかわらず，ジェフアソンに代表される啓蒙的政治思想，教育思想がフルベツキを通じて持ちこまれる可能性が全くなかつたかというと，けつしてそうではなく，その可能性は，充分にあつたといわざるをえないのである。事実，フルベツキが，英語を教える際に，聖書の外にアメリカの憲法や独立宣言を好んでテキストとして用いていたことは，よく知られるところであり，彼がジェフアソンについて，大隈に語つたとして，けつして不思議ではなかつたのである。しかし，フルベツキは，どの程度まで，ジェフアソンを理解していたのであろうか。それは，研究の現段階において筆者にとつても大きななぞであるといわざるをえないのである。ただ，フルベツキがアメリカの憲法，独立宣言に興味を覚え，ジェフアソンに関心をもつようになつた動機は充分に理解できることであり，更に彼が，ジェフアソンの政治思想並びに教育思想の核ともいうべき自然の貴族

制の考え方にふれる可能性は充分にあつたといえるのである。というのは，ジエフアソンには体系だつたまとまつた著書はほとんどなく，パリで最初に出版された「ヴアージニヤ覚え書」(102)がその唯一のものであり，それはジエフアソンを理解しようとするものにとつては，現代においても必読の書となつているばかりではなく，ジエフアソン全集の完成されていない当時においては，ジエフアソンの思想を体系的に伝える唯一のものであつたからである。しかも，この，非常に多くの人々に読まれ，何度も版を重ねることになつた「ヴアージニヤ覚え書」には１７７９年の教育法の概略が，極くわかりやすく示されているばかりではなく，それを支える自然の貴族制の概念も要領よくまとめられており，更に，この１７７９年の教育法案に言及している箇所は，「法の執行と法の性格は如何？」(The Administration of justice and description of laws？)という質問に答える形式で書かれており，ジエフアソンの思想を最も良く現わしている部分として，多くの人々に好んで引用され，言及されている部分でもあるからである。(103)

フルベッキが自由の国アメリカにあこがれて海を渡つた人であり進んでアメリカ人になりきろうとつとめ，更に，アメリカの神学校でアメリカ人宣教師となるための正規の訓練を四年間にわたつて受けた人であることを考えると彼が，このジエフアソンの「ヴアージニヤ覚え書」あるいはジエフアソンの自叙伝等を読んで，１７７９年の教育法案や自然の貴族制の概念についてもかなり深く知つていた可能性は，けつして小さくはなかつたと考えられるのである。特に，この「ヴアージニヤ覚え書」そのものが，「アメリカの事情を，科学的に正確にヨーロッパ人に伝えようとする」(104)意図のもとに書かれたものであり，その初版も１７８６年ジエフアソンが，駐仏アメリカ公使としてパリ滞在中に，パリの出版社から仏訳版で，出されており，翌１７８７年その英文版が最初に公刊されたのもアメリカにおいてではなく，ロンドンからであつたことを考えると，その可能性は無視しえないものとなるのである。当然，「ヴアージニヤ覚え書」は，アメリカ人自身よりもアメリカを知ろうとするヨーロッパ人の間でまず広く読まれはじめた書物であつたのである。このようにみてくると，フルベッキが，「ヴアージニヤ覚え書」を読んで，ジエフアソンの自然の貴族制の概念について，ある程度理解していた可能性はかなり高かつたとみてさしつかえないように思われるのである。

ただし，これはどこまでも可能性の問題であり，フルベッキが，アメリカの政治と教育に深い関心をもつていたことは明らかなことであり，大隈を含む長崎時代の門下生達に，アメリカ合衆国憲法や，独立宣言について教え，ジエフアソンについても言及していたことは，間違いないにしても，フルベッキが，「ヴアージニヤ覚え書」を読んでいたという確証は今のところ見当らないのである。ただフルベッキの活動のあとを辿つてゆくならばあたかも彼が，ジエフアソンの政治思想や教育思想特に自然の貴族制の概念と相通ずるある一つの考え方を持つていたことは確かなことであり，そのような彼の考えが「学制」の起草においても反映されているように思われることは極めて興味深い点といえるのである。しかして，それは，単にフランスの近代教育制度の成立にも少なからぬ影響を与えたといわれるジエフアソンの教育法案を支える理念が間接的にではあれ，「学制」にも影響を与える可能性があつたという点で，興味深い問題であるばかりでなく，より巨視的な目をもつて比較教育制度史的にとらえても実に興味ある問題であるように思われる。　しかし，ジエフアソンの教育法案の運命と「学制」のそれを比較制度史的に検討することは，後の章にゆずることにして，ここでは，フルベッキが長崎において何をしていたのかに焦点をあてることにより，フルベッキその人の理解を更に深めておきたいと思う。

先に，フルベッキが，「済美館」や「致遠館」において新約聖書やアメリカ合衆国憲法，独立宣言等を主なるテキストとして英語を教える一方，請われるままに，彼の知つていることは，なんでも教えることに決心したことについては，すでにふれたが，彼は，一体誰にどんなことを教えていたのであろうか。このことに関し，フルベッキの教えを受け，後にラトガス大学のあるニュー・ブランスウイックの神学校のホープカレッジ(Hope College) に留学し，１８７９年（明治１２年）にはそこを卒業し，帰国後は，麹町教会の牧師をつとめていた大儀見元一郎(105)の語るところによれば，フルベッキが長崎に来て以来，日本中のあらゆる地方から外国文明に関心を持つ若者達が１人又１人と長崎に集まつてくるようになり，英語やオランダ語の修得のみならず，あらゆる分野の学術を身につけようとしていたのであるが，フルベッキは，医学を除くすべての分野に通じていたため，彼等は他の教師につく必要がなく，すべてフルベッキ博士(106)に聞けばよかつたといつているのである。又彼等は自分の持つている天文学，航海術，数学，測量，物理学，化学，築城学といつた本までをも含めありとあらゆる本を持ちこんでは，フルベッキの教えをうけていたといつているのである。(107) この大儀見師の言葉からも，当時の若い有能な武士達がどのような知識技能を求めていたかがわかると同時にこれらの若い武士達の必要を容易に満たしえたフルベッキが，いかにこれらの若い武士達の信用をかちうることになつたか容易に想像されるのである。宣教師とはいつても，ユトレヒトのポリテクニック・インステイテューションで正規の工業教育を受け，更に病気になるまでは，鉄道技師として働いたこともあるフルベッキにとつて，この種の質問は，むしろ最も容易な質問であつたと考えられるからである。

しからば，次に英語，オランダ語をはじめとして，政治，経済，軍事科学（Military sciences），物理，化学，天文学，航海術，数学，測量，築城学等の諸学等の諸学科に関するおそらく，アメリカやイギリスのアカデミーあたりで用いられていたテキストと考えられる，これらの書物を拘えて，フルベッキを訪れた青年武士達の中には，一体どのような人々が含まれていたのであろうか。あちこちの文献に散見する長崎時代のフルベッキと交渉のあつたといわれる人々の名前を整理してみるならば，その中には，大隈や副島の外に，

小松帯刀，西郷隆盛，大木喬任，伊藤博文，井上馨，杉亨二，何礼之，岩倉具定，岩倉具経，江藤新平，後藤象二郎，細川潤次郎，大久保利通，横井小楠，横井左平太，横井太平，中島永元，石橋重朝，丹羽龍之助，江副廉造，中野健明，小出千之助，石丸虎五郎，中牟田倉之助，馬渡八郎(108)

といつた人々が含まれているのである。これらの人々の名前をみる時，グリフイスが「古い政府をうち倒して，新しい政府をうちたてたのは，まさにフルベッキの生徒と彼の友人達の一団であつた。」(109) といつているのもあながち大げさすぎる表現ではなかつたことがわかるのである。しかし，フルベッキ自身は，グリフイスもいつているように，このようにして請われるままに，これらの血気さかんな青年達に教えることが，どのような結果を招くことになるか思つてもみなかつたように思われるのである。(110)

ところが，国の内外共に騒然としていた維新の前後において，１日といえども，授業を廃止することなく，続けられた長崎の２つの学校において，熱心に教え続けていたことが，はからずも彼自身の運命を全く思わぬ方向に，展開させていくことになつたのである。すなわち，明治維新の成立によつて，彼は，「教育を全ての進歩の礎とする」(111) ことに決意した彼の教え子達に懇請されて，いまだ，混とんとした情勢にあつた東京にいそぎ招請されることになつたのである。(112) かくして，彼は，彼の日本における生活のうちで最も華やかな第二の時期つまり，日本政府の最高顧問時代ともいえる

時代を迎えることになるのである。フルベッキ自身，東京に呼びだされたことに関して，１８６９年３月３１日付のフエーリスあての手紙において，次のようにいつている。

「江戸において私自身に割当てられる特殊な任務にかんして，私自身まだそれがなんであるのか，はつきりつかめておりません。私は，ただ次のように言うことができるのみです。私は，私を江戸に呼びだすために骨折つてきた帝国政府の高官となつた人々に全幅の信頼をおくのみです。彼等が，私を江戸に呼び出した表向きのそして疑問をさしはさむ余地のない最終的な目的は，結局，帝国大学（an imperial university）といつたものを私に建てさせることにあるようです。来月，帝（ミカド）が西京（都）から江戸におもどりになります。最も有力な大名達も又帝国の憲法の改正と条約改正並びに，ヨーロッパ及びアメリカに大使を派遣することに関して審議を行うために江戸に集まつてくるはずです。政府は私に，この大事件の起る前に江戸に来てほしいといつておりました。私は，私がこれから是非とも必要といたします（神の）英知と恩寵とへりくだつた心がきつと与えられますようにと祈らざるをえません。あるいは，私は思いちがいをしており，すくなくとも私が，これから関係しようとしているこれから起るはずの今年一年間の諸々の事件を過大評価しているのかもしれません。あるいは私はそれらを過小評価しているのかもしれません。何がおころうと，私は，ただ単なる偶然で，江戸に呼ばれたのではなく，ここで一つの仕事をしなければならないのだということを信じております。そしてその仕事をしていくうちに，自分に不充分な点があることに気づきました時には，私は神（Master）に助けを求め，そのお導きを仰ぐことにいたします。この確信こそ，困難の山をも動かすことが出来るものと思つております。

私は，情勢が最も不穏な時期に江戸にやつてきました。私の目の前にあります計画表には，まずこの春に私が江戸に来ていなければならなかつたこと，次いでこの夏には，全国の大名が議会に招集されること，(113) そして，この国の諸法令の改正が論じられ，私はそれらの問題について助言者（adviser）となるはずになつていること，更に，この秋か冬には，一種の帝国高等学校（a kind of Imperial High School）の設立に着手すべきこと等が列挙されております。このような計画を示されては，勝手にこれをことわる気にはとてもなれません。特に，このようなことを私から進んで求めたのでは決してなかつたからです。私は，いつも，私自らのはじめたことと，私自身の計らいなしに，もたらされたものとの間に，大きなけじめをつけて参りました。前者にかんしては，私は，どうしてもそのなかに私自身の利己心が入るおそれがあります。それでそのような時には，いつも，慎重に考えて行動することに致しております。しかし，後者の場合におきましても，神聖なるお計らい（divine blessing）の下に成就されるべきはずのものを妨げるような私自身の利己心以外にも，他の人々の利己心（Other "Selves" とある）もあるのだということをとかく忘れて，私は多分しばしば（sometimes perhaps）あまりに信頼しきつてことを進めてきはしなかつたかと反省致しております。しかしながら，私はここ江戸に出てまいりまして，すべての事柄があらかじめ予想された通りに運ばれていることを知りました。私は，何人かの政府高官の心からの歓迎を受けました。しかし，それは長く続きませんでした。北方の大名（northern daimios）やその他の極端な保守派（攘夷党）が現われました時，政府の全機関（the whole engine of government）に変化が生じたのです。

今や攘夷党は非常に強力なものとなつており，最も自由な人々でさえ，これらの保守的な人々の激情の発作が結局は過去のものであ